

永田和宏著

『あの胸が岬のように遠かったー
河野裕子との青春』 (新潮社)

若き日の河野裕子の愛くるしき、知性、優しさはいかばかりかと果てしない思いになる。同時にその情けの深さが腑に落ちる事実の数々。永田のやわらかな筆致が語る。一九五一年に三歳で母を亡くしてから一九七二年に河野と結婚するまでの永田和宏の半生記。河野の死後に見つかった彼女の日記や互いの書簡からあらわれた新しい発見。持ち物の中には永田の日記もあった。青春時代の恥の数々やこれまで二人が語ることのなかった過ちも記され、二人の短歌や、河野の至言「生と一緒に死というものもはらんでしまった」の背景も明らかとなる。岩波書店「波」連載の執筆は辛いものであっただろう。

河野は永田ともう一人、コスモス在籍時代、同会員の男性「N氏」との間で愛の悩みに苦しんだ。永田のなかには今でも「ほんたうに俺でよかつたのか」という思いがありつづける。

戦後の京都の学生の生活や教育、科学の文化の記録としての側面も興味深い。NHKにてドラマ化決定。(白川ユウコ)

toron* 歌集

『イマジナシオン』 (書肆侃侃房)

『イマジナシオン』とは、フランス語で「想像」。こうありたいという世界を想像すること、現実から数ミリほど浮遊する、そんな歌集だ。よって、奇想ではなく、現実と地続きであり、その延長線上を想像する。また、世界を肯定的に捉えており、軽やかである。

果てしない夜をきれいに閉じてゆく銀のファスナーとして終電
一对のナイフとフォークのようになり
傷つけ合っても並んでねむる
いずれも、日常の場面を切り取っている
が、見立てに独自性がある。また、言葉が美しく、幹旋に無理がない。

三面鏡じつと見つめてそのなかでいちばん強いわたしを選ぶ
雨音は雨でなくなるときの音まばたきを繰り返して過ごした

更に、空間を捉える感覚が優れており、鋭い発見がある。
ツイッターで短歌に出会い、二〇一八年から作歌し始めたという作者。今後が楽しみである。(大西 淳子)

犬養楓歌集

『救命』 (書肆侃侃房)

本書は、救命救急医である犬養楓の第二歌集。第一歌集『前線』からわずか一年で刊行されたが、その一年の中で犬養自身が、そして医療現場がコロナ禍でどのように疲弊していったか、絶唱のような歌から克明に浮かび上がる。

叫んだら息が続かぬこのマスク叫びた
いほど苦しいけれど
人間を辞めたくなれり 五十代に延命
希望の有無を聞くとき
休むことも休まれることもお互いに言葉にできぬ苦しさがあり

叫びたいほどの状況にあつて、犬養はそれでも顔を上げ続ける。夜明け前を思わせる装丁からは、犬養の絞り出すような願いを感じずにはいられない。

明日生きているか分からぬ人々に明日を届ける救命医療

犬養は短歌が千年以上持続可能な記録であるとし、自身の経歴を詠み込んでいった。令和のコロナ禍が歴史となった時、千年後の人びとに犬養の叫びはどのように届いているのだろうか。(宮太一郎)